

# 作家の肖像

## 第3回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



Lee Ufan, 2008  
Photograph by GH Christmas, courtesy Pace Gallery

## 1936- 李禹煥

### リ・ウーファン

1936年韓国生まれ。ソウル大学校美術大学を中退後、56年に来日。日本大学文学部哲学専攻卒業。60年代後半より、「もの派」の中心的作家として活躍し、80年代より欧米でも積極的に作品を発表。主な個展に「李禹煥 余白の芸術」(横浜美術館 2005)や、「MARKING INFINITY」(ニューヨーク グッゲンハイム美術館 2011)など。著書に『新版 出会いを求めて』(美術出版社)、『余白の芸術』(みすず書房)など。

## 「究める」人

李さんとのつきあいは、もう40年以上になるでしょうか。彼は、パリと日本を拠点に生活しているのですが、日本に戻ってくると必ず電話をかけてきてくれます。そして、私たちは行きつけの喫茶店で待ち合わせて、いつもの席に座り、会わなかった間にあったことなどを、あれこれ話します。李さんは、とても多趣味な人で、話をしている飽きるどころか全くありません。クラシック音楽やワインなど、好きなものはとことん追究し、専門家もかなわないほどの知識をもっています。「究める」ということに、関心が強い人なのでしょう。

1993年、私が神奈川県立近代美術館に勤務していた頃に、李さんをお願いして、《照応》シリーズの個展を開催しました。そのとき、「空間をどう使うか」ということを、徹底的に追究していく彼の姿を、初めて目の当たりにしました。作品によって、空間の表情がどう変わるのかを敏感に察知し、例えば1点の絵を架ける高さなど、細かいことにも全神経を集中させていました。当時、私はその姿を見ながら、「究める」ことに熱中する作家と出会えた喜びをかみしめていました。

## 確かな存在感

李さんの作品は不思議なもので、一度見ただけでは、作品に「その見方じゃダメだよ」と言われている気がします。だから、私は何度も作品の前を行ったり来たりして、気持ちを引き締めて見たり、リラックスした状態で眺めたりしてみます。そう

やって、さまざまな角度から向き合わなければ、よさを感じ取ることができないと思うからです。

彼の作品には、確かな存在感があり、それによって、作品を含めた空間全体が生き生きと動き出します。時には、軽やかな音楽が聴こえたり、光を感じたり、深い闇を想像したりすることができます。私は当館の所蔵作品『線より』に向き合うと、ある種の音楽的なリズムが聴こえてくるような気がします。

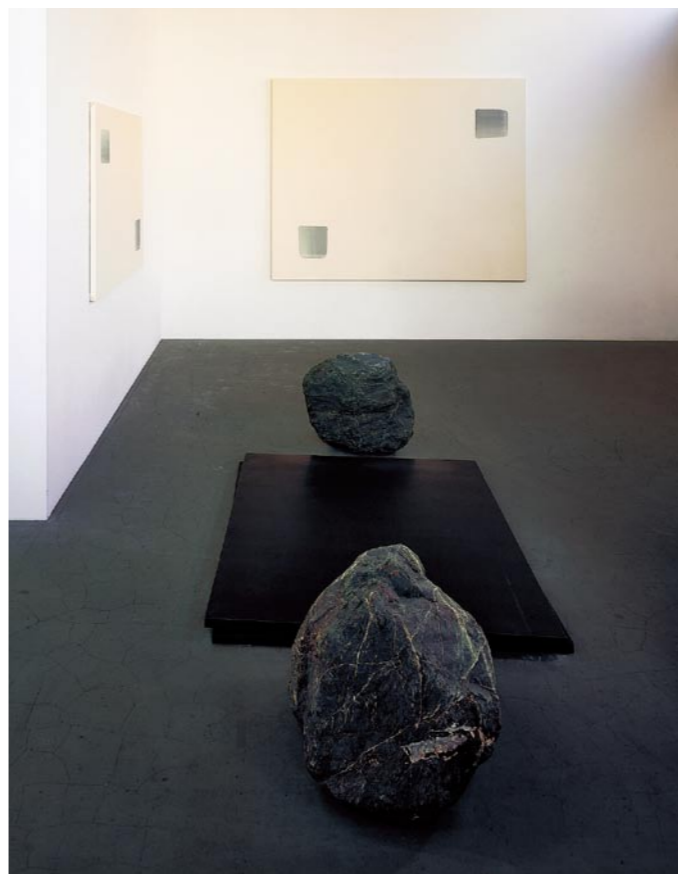
## つながりを求める姿

点や線のみで構成された《点より》《線より》シリーズに始まり、さまざまな方向へ筆を走らせた《風より》《風と共に》、そして、余白に心地よい緊張感が漂う《照応》、見る者へ語りかけるような《対話》……と、李さんの作品は、年代とともに少しずつ変容しています。

私はそこに、韓国から日本へやってきた青年が、人との関わりを求め、そして出会う姿を重ねます。作品に描かれる点や線もまた、出会いを求めているように見えるからです。李さんは他者とのつながりをとても大事にする人ですから、来日したばかりの若い頃は、孤独に苦しんだことでしょう。しかし、そこから李さんの、自己形成と社会との関わりを深める思索が始まっていったのです。今後も、李さんがどのような作品を生み出してしてくれるのか、私は期待してやみません。(談)

### 酒井 忠康

さかい ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
平成24年度版光村図書中学校「美術」代表著者。



上／『線より』  
キャンヴァス 岩絵具 218.5×290.5cm 1980年  
世田谷美術館蔵

左下／展覧会の風景  
『照応』と『関係項』が展示されている。  
2002年、SCAI THE BATHHOUSE (撮影:安齋重男)

右下／『風と共に』  
キャンヴァス 油 岩絵具 227×182cm 1983年  
李禹煥美術館蔵(撮影:渡邊修)